是いかなる場、いかなる人と、其業・其位を能見定め、前句をつきはなしてつくべし。（去来抄）

師のいはく「付くといふ筋は、匂・響・俤・移り・推量抔、形なきより起る所なり。心通ぜざれば及びがたき所也」。（三冊子）

蕉風の付合は、前句と付句との間に「よきほどに隔り」を置くことによって、その間に醞醸する気分を尊ぶ。その付筋は前句の余情や余韻を嗅ぎ出す付け方で、そこに匂・響・移り・位の感合が生じる。「前句をつきはなし」「形なきより起る」とあるはそれである。次に挙げる『となみ山』所収の付合は、前句の場から人情を嗅き出した付句である。

野松にせみの鳴き立つる声　浪花
歩行荷持手ぶりの人と噺して　芭蕉

両句間の感合を能くよく味ってみるがよい。

それからそれへと

――有島武郎――

菊地　弘

ひとりの作家が誕生するまでの過程を探っていると、どうも腑におちないところがあったり、疑問をもったりして、それが気にかかって前に進まない場合がよくある。とくに作家自身に、作品のモチーフやテーマに関わるものであれば、いらだちとやりきれなさで複雑だ。

小説家有島武郎といえば、『或る女』、『カインの末裔』、『小さき者へ』などによって日本近代文学史のうちに積極面を付与したことは誰でも知っている。その有島が明治三十七、八年の頃、芸術というものは生活の余裕が生みだすものという芸術遊戯説を考えていた。ところがすぐそのあと文学に向う決心をして、明治三十九年の四月に『かんかん虫』を書いた。処女小説で、のち「白樺」（明43・10）に発表されたが、有島が下層労働者に心を留めていたことがわかるもので、問題小説である。有島文学の方向を示すものとして注目されることは通説である。芸術の遊戯から芸術へ向う決意をする、そのファナティシズムには興味と関心がそそられる。『私の父と母』の中で、父は薩摩の人、母は南部の人で、「南方の血」の父は感情的で、「北方の血」の母は理性的であった。〈私自身の性格から云へば、固より南方の血を認めない訳には行かないが、割りに北方の血を濃く承けてゐる〉という有島自身の語りに照らしてみるとはなはだ難しいことになる。「南方の血」、「北方の血」のパターンにはめて考える俗説は避けたい。野島秀勝氏は有島のエネルギー発源の一端も「南方の血」、「北方の血」の二元のなかにあった、というよりは二元による自己把握のなかにあったと、「人道主義の振幅」のなかで書いている。巧みな表現であるが、「自己把握のなかにあった」とすると、少々意地悪い言い方だが、思考の様式にやはり一つのパターンがあったことになる。とするとそのパターンは有島の文学営為にどうかかわってくるのか問いたくなってくるわけである。

有島が札幌農学校を選んだ動機についてはいろいろのことがあげられているが定説はない。有島は自ら〈東京に住み続いてゐたら、健康が保たれないと医師から宣告されて、羸弱な自分の肉体をはか

なみながら、見渡した地方の学校の中で、殊に私の心を牽き付けたのは札幌農学校だった。幼稚な時から夢のやうな憧憬を農業に持ってゐたのも一つの原因であるが、北海道といふ未開地の新鮮な自由な感じと、私の少年期の伝奇的な夢想と結びつき、人前で怯れ勝ちだった私の性情が、境地の静寂を希ったものも与って力があった〉（『リビングストン伝』の序）と書いている。が、この序文をそのまま鵜呑みにしていいのかどうか、これまた難しい。たまたま母方の親戚にあたる新渡戸稲造が札幌農学校で教鞭をとっているからという事情を考慮しても、病患で都会生活に耐えられない身で、当時蝦夷地と呼ばれる北海道へ行くことを父が許したであろうか、また、農業に夢のような憧憬をもっていたというが、はっきりした農業従事の意志をもっていたとも考えられない。有島が〈農業革新の魁たらん〉と意志を表明するのは明治三十年五月七日の『観想録』にみえてくるので、札幌農学校に入学後約一年経てからであるから、農業への志向は動機の大きな要素とはみられまい。さらにまた、北海道という大地が明治の青年には新鮮な自由の天地の感を与えたことは、国木田独歩などをあげてみても理解できる。加えて札幌農学校が創立以来クラーク精神を伝統としていて、青年の心を惹きつけたことも考えられる。が、実業家の父が家督を継ぐ武郎に特殊な教育をスパルタ風に行なってきたいきさつを考えてみても、無条件で武郎の札幌行きの意志を許す筈がないように思われる。野島氏は『私の父と母』のなかで有島が語る、幼いときから父の前で膝を崩すことのできなかった厳しい躾、学校から帰ると母から論語や孝経を読まされたことなど、弟たちとは違った「峻酷な儒教的教育のもとに育った」ことをあげて「長男からの脱出」説をとなえている。この説を有島研究家の山田昭夫氏も恐らくこれは定説となるだろうと有力視している。長男なるが故によきにつけあしきにつけ責任を負わされ、桎梏多き立場に立たされて苦悩する人間群は近代日本文学の中にもさまざまな形で描かれてきている。長男からの逃避行は面白い着想だが有島に限って躊躇せざるをえない。前述したが有島が農業への魁たらんと決然たる意志を示したのは明治三十年で、その意志を強くさせたものは高山亮二氏の指摘のように「東洋的武士道的精神」といえよう。これは父から薫陶をうけたものである。父武は明治三十年九月に武郎のために農場を借り入れる目的でマッカリベツ原野を訪れている。父は武郎を温かくつつんでおり、有島の意志は尊重されていて抑えられていない。明治的発展の近代に有島は即応していて、実業家父武の気脈と隔絶するものではなかったのではないか。父武は大蔵省の官吏であって理財家として有能でのち実業界に入って資産を成した人だが、新しい知識の必要性をわきまえていた人でもあった。これからの人間は外国人を相手にするのであるから、外国語が必要であるといって、六・七歳の頃武郎を外国人の家庭に入れたという。普通の家庭では想像も出来ない程頑固で厳しい躾をする一方、実業家にふさわしい進取性が極めて特殊な教育を長男武郎に施さしめたのである。武郎を外国人と一緒にさせる父のうちには儒教的な教育と背反する本質的なものがあった筈だと思うが、それを施すということは、父武の思想の中には儒教的倫理とキリスト教的な倫理とがリゴリズムという一点で結節されていたわけだろう。だから日常的行為にあっては相互矛盾するものとしてでなくむしろ寛大な心となって外発的営みが行なわれたにちがいない。論語や孝経を徹底的に教え込ませると同時に外国人

の生活に入って英語を、というぐあいに異質の教育を併行して行わせるのもその故である。おなじように有島の札幌農学校入学についても、少年よ大志をいだけの気風と実業家としての進取の気風とが内部的に結節されて長男武郎を新渡戸のところにあずけしめたと解されそうである。そうした父武の大変な理解は幕末から明治維新の体制を成した功利主義思想（西垣勤氏も既に指摘している）とかけはなれたものではなかろうと思うが、そういう父の思想が長男武郎を圧迫するようなことはなかったようにみられる。武郎の農業への魁とならんとする義士的なものとファナティクな性質は父と深い溝をしきるものではない。だから野島氏のいう「長男からの脱出」は穿ちすぎるし、「可愛い子には云々という故知を思い出させる黙認」（山田昭夫『有島武郎』）の感傷と消極性ではなかったのではないか。

有島が文学へ積極的におのれを進めていったのは表立っては雑誌「白樺」に参加したときからであろう。が、経済や歴史を専攻していた有島が書くという創造行為によって内的リアリティを追求しようと思うようになるのは二・三年遡るようだ。これもまたなかなか難しい。農場管理の問題、アナーキズムとの関係などが複雑微妙に絡んでいるので大変なことだ。時間をついやすのが研究だと思えばまだ十年時間がある。